

している。十九歳ごろから村の青年団に出征兵士を送る小さなブラスバンドがあつて、クラリネットを担当しながらみんなをまとめ、軍隊の軍旗祭とシベリアの抑留生活ではアコーディオンを演奏し、職を終えての老人会では大正琴と、ささやかながら音楽に携わつた人生でもある。

## 体 験 記

富山県 小 森 繁 雄

大正九（一九二〇）年十月五日、富山県下新川郡舟見町にて、父 甚次郎、母 ひな、の長男として生まれる。兄弟は姉と弟妹四人の六人です。家は農業を営み生計をたてる。昭和二年四月、町立舟見尋常高等小学校に入学、昭和十一（一九三六）年三月同校高等科三学年を卒業し、同年五月鉄道省名古屋鉄道教習所へ入所、同年十月修了し、国鉄高山線西富山駅に駅手として採用され勤

務する。

昭和十三年一月、南満州鉄道株式会社に転出し、奉天鉄道工場に勤務する。昭和十五年四月徴兵検査となり奉天（瀋陽）にて受く。甲種合格となり、昭和十六年二月十日、郷里の富山東部四十八部隊に現役兵として入隊する。同月十九日、満州派遣のため石川県七尾港出帆し、二十三日、朝鮮羅津港上陸、二十四日、鮮満国境通過、満州国牡丹江省寧安県樺林着、歩兵第三十五連隊第二大隊第二機関銃中隊坂本隊に入隊し、事務に精励しておりしも、昭和十六年七月二十四日、関特演特別大演習により樺林出發し、石門子を経て牡丹江省東寧県老黒山に移動し同地にて兵舎を建設し駐留する。

私たち第二大隊松野部隊は昭和十九年一月十日、当時ソ満国境警備中の関東軍指揮下の第九師団（師団長樋口中将）歩兵第三十五連隊（連隊長奥大佐）に大隊長として赴任した松野大尉が第二大隊長となり引き続き老黒山に駐屯してソ連との

国境警備中、南方、沖繩、南洋マーシャル方面及び北方千島、アリューシャン、キスカ、アッツ方面の風雲急を告げるに及び、この方面への作戦参加のため、昭和十九年、関東軍の（重装備師団）

↓（歩兵）精鋭部隊より一連隊当たり一個大隊の抽出派遣が行われ、我が大隊はソ満国境沿いの冬期演習に参加中にこの榮に浴し、昭和十九年二月二十九日老黒山を出発（松野大隊長のみ連隊長より直接北方軍の指揮下に入る事を命令され行先を承知していた）。軍用貨車輸送によって鮮満国境を經由、元山、京城（ソウル）、釜山に着き、釜山において約一週間駐留。同年三月十日、寒地防寒の完全装備と最新式兵器装備を整え、関釜連絡船三隻の船団を組んで、敵の潜水艦の攻撃を避けるため、ジグザグ航行と対空対潜警備、警戒配備で荒海の玄界灘を渡り、同日九州の博多に上陸し、軍用列車による鉄道輸送で山陽線、東海道線、東北本線と列車のよろい戸を閉め、外部の様子は全然見えない中、日本本土を縦断して青森よ

り青函連絡船に乗り津軽海峡を渡り、北海道函館に上陸し、再び鉄道輸送で小樽に至り同地に約一カ月間民宿駐留して昭和十九年四月、北方軍、司令官樋口中将の指揮下に入り、軍司令官直轄の独立部隊となり、さらに北進して根室に至り約一カ月間、寺院や小学校等に分駐して千島へ前進する時を待つ。

固有部隊名 独立歩兵第四百二十二大隊、通称部隊名 憲（後で権に変更）一二六二四部隊、命令系統 八十九師団団長清水中将、混成四旅団旅団長土井少将（松野部隊は千島国後島守備の任務を命令される）。

昭和十九年五月十三日、解氷（国後島周辺は流水で船の航行不可能のため）を待ち、解氷と同時に知床半島ノサップ岬の花咲港より漁船に分乗し、翌五月十四日千島国後島に上陸。同島の守備部隊として半地下兵舎の建設、地下陣地の構築を実施しつつ北方警備の任務を遂行中、昭和二十年八月十五日終戦となり、九月一日より部隊主力は

白糠泊において、私たちは色丹島の穴間、齒舞諸島等において武装を解除す（自主的に）。九月二日、連合軍指揮官の命によってソ連軍が平等、対等の立場で停戦協定を結び平和裏に武装解除する。

### 入ソ状況

部隊主力、大隊本部、二中隊新田隊、四中隊二村隊、機関銃中隊此川隊二個小隊は昭和二十年九月二日国後島白糠泊において武装解除。九月八日東京へ輸送すると言われてソ連のカニ工船に乗船。翌早朝出帆。国後水道を通過して安渡移矢岬を回り国後島北岸を通り、樺太大泊港經由で九月十六日ソ連領沿海州（九月十一日大泊港で積荷の積みかえ作業あり）真岡対岸とおぼしきポートワニ軍港付近のソフガワニに上陸。同地よりまきで走る汽車で貨車輸送され、森林続きの鉄路を休み休み走り、昭和二十年九月二十一日コムソモリスク地区、シベリアのムリー地区第六収容所に入り自後同地に抑留され森林伐採作業に従事する。

また、一部一中隊佐野隊（昭和二十年九月一日色丹島において武装解除）、九月五日鈴木作業大隊（指揮官 鈴木大尉）に編入され、九月九日、色丹出帆、樺太大泊經由九月十六日ポートワニ上陸。同地において部隊主力と接触せるも別の車両で別輸送となったが、その後消息不明となる。また一部重機関銃主力此川隊、三中隊安村隊は九月一日色丹島穴間において武装解除。九月六日大浜作業大隊（指揮官 大浜中佐）に編入。色丹島及び国後島において作業に従事する。

九月二日より穴間湾の岡の上で野営をし、付近の糧秣庫より食糧を集め自炊する。糧秣は日本軍が山中に備蓄してあったのをソ連兵の目をかすめて徴発した。そして六日まで同じ場所でも何もすることなく、ソ連兵の看視のもとでただ糧秣の徴発に苦慮した。そして翌日から約三十人単位の作業班を作り、日本軍が山中に備蓄積保管してあった糧秣（玄米、俵に入っている。六十キログラム入り）を山中から約二キロの穴間湾の仮設棧橋まで

運ぶ作業を一週間も続ける。ソ連指揮者に、この米はどうするのかと尋ねると、おまえたちの同僚が食べるのだから大切に船積みするように注意される。また、一部は日本内地へ送り、国民が食糧が無くて困っているから渡すのだ等と言つて作業をせかせる。島に日本軍が残した被服、医薬品その他物品をソ連の船に積み込む毎日であった。その作業が一段落すると、穴間湾で武装解除した日本軍の兵器、弾薬を集積してある場所から選別し、兵器類は破壊し、弾薬とともに小舟に積んで穴間湾の沖合の海中に捨てて作業で、兵器には「菊のご紋章」が刻まれているのを見ると、何とも言いようのない気がします。

十一月中旬ころになって色丹島の整理も大体終わり、自分たちの作業班六十人は十一月十五日、国後島の押臼へ移動し、同所で水車を動力として製材所を営業しておられた民間人の野田豊次郎氏の指導のもとで伐採作業と製材、大工仕事と、ロシア人の住む住宅の建設作業に従事する。作業は

元島民の方と一緒に、またソ連人もまじつての仕事で、割合気楽であった。宿舎は戦前に島民が住んでおられた家屋、引き揚げて留守になっている家屋がほとんどで、その家を改造して宿泊していた。また、元島民の方々も、内地へ引き揚げるのが遅れた方、自分たちの都合で島に残留しておられる家族も四家族ほどおられ、ソ連人の指導者となって漁師、大工等をして生活しておられます。私たちは、このような作業を続け、いつ内地へ帰れるのか、また内地はどうなっているのか、外部からの情報が少なく、時々ソ連人は、今は日本へ帰つても、家もアメリカの空爆で焼けてなくなり、食べ物も不足しているから、帰らないでここにおった方が良いのだといつて話をしていました。しかし望郷の思いは年月が経つにつれて深くなり、一日も早く帰れることを祈る。

国後島での作業も終わり、今度こそ日本へ帰れるのだと思い、昭和二十二年八月二十六日、国後島を出帆したが、着いた港は樺太大泊港で、上

陸、直ちに汽車に乗り北上し、八月二十八日、樺太気比収容所に入り同地に抑留、伐採、草刈り、道路の建設に日夜にわたりノルマに追い回され、今まで色丹、国後島での作業と異なり、食糧も悪く、栄養失調で、寒さと疲労のため毎日のように犠牲者が出るようになり、心細くなる日が続き、過酷な冬山伐採にあえぎ、一生懸命に帰国を待つ。樺太の気屯（北緯五〇度線まで約十八キロメートル）に遅い春が来た。二十三年五月、極限の抑留生活も三年に近い年月が経った。

#### にわか治水工事

ある日（日時忘れる）収容所へソ連兵とソ連民間人の監督者が来て、河川工事の技術者がいないかと尋ねたので、抑留者の誰からも返答がなく、帰りがけたソ連人に坂下君がどんな工事かと尋ねると、川の蛇行している区間を流路変更するのだと言い、「やれるのか」と問われたので、坂下君は「現地を見た上で判断する」と答え、翌朝案内されて現地に着いて見ると、河川は既に増水期に

入って水かさが増している。坂下君は、やっていると決断し、必要な人員二十人を指名し、器材等必要なものも用意できるとの事で、やる事にする。期間は二十五日間で行うようにノルマをされる。

翌日から二十人の作業員を班別に、伐採、玉石の集積、そだ（柳）により資材集積充分と見た後、三つまたを組み、中棚に重石を乗せ、双方の川倉をそだで繋ぎ、右岸側から順次投入する毎日であった。朝と夕方の目測でも水深が増すような水勢との闘いは、暖をとるたき火が不可欠、疲労に耐えて交替の作業を続けながら、大型川倉の六組目を投入したのが作業開始から二十三日目であった。さてあと二日の工程に名案もなく、空虚なうちに一夜が明けた。ダワイ、パイジョン、と警備兵に促され、半ばあきらめていたのに、皆と現場に着くや、投入した川倉の制御効果的中し、水勢が目標通りに左岸堤を崩し、掘削した流路が主流に変わっていたのである。工事完成の報

告に駆けつけたソ連の監督は「ハローシー、エンジニエル」と満足していた。この工事により、日本人の技術にびっくりした様子であった。

そして、昭和二十三年九月六日、樺太の真岡を出帆し、新興丸にて函館港に上陸し、引揚援護局にて帰郷旅費四百五十円と未支給前渡金五百円也と特配購入切符引換券を受け取り、船で青森港着、汽車により六年前に北方へ向かった東北線を今度は東京へ向かって南下する事となり、車中の人となる。宮城県通過中に、米をかついだ人たちがたくさん乗車して、東京近くになったとき列車が徐行し、窓からその米を外に投げ出しているのを見て、びっくりした。ヤミ米の運搬だと後で知った。東京で一泊し翌日我が家に着く、迎えに来てくれた父の顔が大変に印象に残っている。うれしかった。

帰国後は農業に従事し現在に至る。

## 抑留生活のかすかな記憶

福井県 石川 好廣

大正十四（一九二五）年三月二十一日生まれ

今立郡今立町大滝

昭和十四（一九三九）年三月二十四日

岡本尋常高等小学校卒業

昭和十八年一月まで

家業の和紙製紙業に従事

昭和十八年一月二十六日

大阪陸軍造兵廠に軍属として従事、二十年二月

一日まで

昭和二十年二月十日

徴兵により高射兵として舞鶴市東部〇〇部隊に入隊

入隊

昭和二十年二月十三日

現地教育のため満州に出発